Osaka University Knowledge Archive

Title	楚簡資料による戦国期楚方言音の研究
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81954
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（鳥羽　加寿也）	
論文題名	楚簡資料による戦国期楚方言音の研究

論文内容の要旨

本論文は、以前より活用されてきた先秦期の各種伝世資料に加え、近年新たに発見された、『郭店楚墓竹簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』などの戦国楚簡を材料とすることで、中国語の歴史の中での戦国期、特に楚地の言語音の様相（韻部と声調の体系）を明らかにすることを目的としたものである。また、これまで総合的に整理されることのなかった楚簡の韻文を網羅的に収集することで、本研究のみならず、広く先秦期の韻文を活用する研究に対して新たな資料を提供することも行っている。

本論文は全体として四章と資料編で構成される。以下各章および資料編の概要である。

第一章「上古音研究史」では、現代の音韻学の基礎となっている、清代の顧炎武から江有誥に至るまでの清代音韻学の発展の歴史を、顧炎武・江永・段玉裁・孔広森・江有誥の順に、彼らの原著を引きつつ簡単に紹介する。それによって、全体の流れの中で、音韻学において何が問題とされてきたか、また現在まで残されている問題は何かということを明らかにし、後の第三章や第四章で議論すべき内容を導き出す。続いて清代以降に、西洋の学術手法の応用によってもたらされた音韻学のさらなる発展と、王力氏による脂微分部や、Yakhontov氏による伝統的韻部の細分といった、議論の残る点を紹介し、第三章に向けての課題を提示する。また、現在の音韻学でともすれば金科玉条ともいえる、音価の再構における分化条件の絶対視という方向性に対して、本論文でこれを絶対視しない理由について説明し、第三章の「個別字」の項目の基礎とする。

第二章「上古音研究の資料」では、これまで上古音研究に用いられてきた各種資料（韻文・通仮字や異文・諧声字・親族言語との比較等）について、それらを活用する上での長所や注意点に触れつつ、本論文で活用する楚簡の韻文や通仮字の、他資料に対する利点を解説する。一例を挙げれば、古音研究の歴史において、資料への「漢以後音」の混入は、しばしば混乱をもたらしてきたが、科学的測定によりその成立年代の下限が確定されている楚簡は、この点において、伝世資料と比較して有利である。また、音韻分野での楚簡を用いた先行研究について、往々にして用例の選択における吟味の不足がみられ、それによって不適切な結論を得ていることを指摘し、本論文においては、疑わしい例は排除し、また例示の際に文字だけを挙げるのではなく、その文字がそのように解釈される根拠も示すことにより、例の量よりも質を重視する方針とすることを述べる。

第三章「韻部」は本論文の主要部分である。本章では、上古漢語の各韻部について、戦国期の楚地の資料と他資料とを比較することにより、戦国楚音と他地域・時代の音系との異同を論ずる。構成としては、李方桂『上古音研究』の順序に従い、上古各韻部を配列し、それぞれの韻部の下には、それぞれ「総論」「個別字」「接触・下位分類」の節を設けている。「総論」の節では、その部の主要な先行研究における音価と、中古音（『廣韻』の韻目）との対応関係、『詩経』における他部との通押例といった、上古音研究における基礎的な情報を確認し、議論の基礎とする。また、楚簡の韻文や通仮字、必要に応じて『楚辞』を利用し、その韻部が戦国楚方言においても、他の韻部から独立しており、なおかつ内部で分化しておらず、単一の韻部としての地位を保っていたということを確認する。「個別字」の節では、諧声字や『詩経』といった上古音の基礎資料から考えられる音韻的地位が、楚簡や『楚辞』といった戦国楚の資料からの再構とは異なる可能性のある字に注目し、その字の帰属を論ずる。「接触・下位分類」の節では、楚簡資料から読み取ることのできる、通押関係や通仮関係等の情報により、韻部間の距離を測り、その『詩経』音系との差異を考える。また、清代以後の近現代的音韻学の段階で、Yakhontov氏をはじめとする音韻学者によって主張された、伝統的韻部の元部や歌部等における下位分類が、戦国楚方言においても成立するか否かを検証する。

第四章「声調」では、調値ではなく、専ら調類にのみ注目し、戦国楚方言における調類体系の特徴を検討する。前提として、まず平声と上声との別が戦国楚方言においても存在することを、楚簡韻文に基づき、簡単に確認する。続いて去声と入声との関係について、これを甲類韻部（牙音韻尾を持つ韻部およびそれと相配する陰声韻）と乙類韻部

（舌音韻尾を持つ韻部およびそれと相配する陰声韻）とに分け、それらの楚簡韻文やその他各種先秦韻文での押韻における振舞いを観察することで、それらの差異を検証する。

付録「楚簡韻読」及び「楚簡韻譜」では、本研究の資料の根幹部分となる、楚簡から網羅的に収集した韻文について、特に重要なものには注釈および翻訳を施すことで、筆者の資料に対する理解を示し、本論文の再検証性を担保するとともに、今後の楚簡を利用した音韻研究に資する資料を提示する。「楚簡韻読」は、江有誥『先秦韻読』の形式に倣い、楚簡文献中の押韻個所を抽出し、その韻部を指摘するものである。「楚簡韻譜」は、段玉裁『詩経韻分十七部表・群経韻分十七部表』や、羅常培・周祖謨『漢魏晋南北朝韻部演変研究』の形式に倣い、「楚簡韻読」を基礎とし、その韻字のみを抽出し、部ごとに並び替えて整理したものである。

本論文が上述の各種検証を経て得た結論は、以下の通りである。

まず、韻部については、基本的に『詩経』や諧声字から帰納される韻部体系と、戦国楚方言音系との間に大きな違いは存在しない。むしろ月部や歌部などの韻部における下位分類の存在などは、『詩経』音系と戦国楚方言音系とが共有する特徴である。先行研究において指摘されていた、「戦国楚方言音特有の性質」というものも、本論文の検証の結果、その多くが否定されるか、或いは大いに疑わしいものであるということが示される。しかしながら、『詩経』音系と戦国楚方言音系との間には、なおもごく小さな差異は存在する。之部の母音に狭まる傾向が見えること、物部と質部との区別が『詩経』音系よりも厳密になされていること、歌部と支部との間に、歌部に起因する接触の傾向がうかがわれること、元部において母音の円唇非円唇の別に曖昧性があることなどが、この小さな差異にあたる。

戦国楚方言音系と『詩経』及び諧声字を基礎として再構された上古音系との間に、体系的な差異がほぼ見いだされなかった一方で、個別の字の所属に関しては、一定数の差異が認められた。例えば「利」は詩経の押韻では、質部であるとも判断され得るが、楚簡韻文では一貫して脂部字とのみ押韻するため、少なくとも戦国楚方言においては、脂部に属していたと判断することができる。また、従来帰属が明らかでなかったいくらかの字に関しても、楚簡韻文の追加により、戦国楚方言における帰属が確定された例もある。一例を挙げれば、「戲」字の帰属について、楚簡は戦国楚方言のみならず、広く戦国期の言語についての情報を提供する。「戲」が魚部字であるか歌部字であるかという問題は、未解決であった。段玉裁は許慎がこの字を「虘」声（魚部）としたことを否定し、「虘」は諧声符ではないとしたうえで、歌部に属するとする。一方で、江有誥や王力氏などは、『楚辞』遠遊において「戲」が魚部字と押韻することを重視し、魚部に帰する。中古音では、「戲」は支韻に属するため、上古歌部であると考えられる。しかしここに清華簡『管仲』の「及后辛之身、其動無禮、其言無義、乗其欲而恒其過、既怠於政、又以民戲」という韻文が加わることで、「戲」が歌部に属する可能性が高まった。

さらに、そもそも『詩経』や諧声字から帰納される韻部体系と、戦国楚方言音系との間に大きな違いが存在しないということ自体も、本来自明なことではなく、本論文がこれを戦国楚簡の韻文の利用により示したことは、今後の戦国楚方言研究の継続において不可欠な過程である。

声調に関しては、平声および上声に関しては特に『詩経』音系との差異は認められなかった。しかしながら、入声から後に去声へと転じるもの（本論文で「去声２」と呼称するものに相当）のうち、甲類韻部に属する字と乙類韻部に属する字との間には、『詩経』音系と戦国楚方言音系との間で、比較的大きな差異が認められた。すなわち、戦国楚方言の段階においては、甲類の去声２の字は、相配する陰声韻部の字と押韻する傾向があるのに対し、乙類の去声２の字にはそのような傾向が認められないのである。このような傾向は、『詩経』の中でも成立が新しいと考えられる詩や、『管子』や『荀子』などの北方で成立したと考えられる戦国期の諸子文献の押韻の傾向とある程度の類似が認められる。故に、去声２が去声へと合流していたことは、戦国楚方言のみならず、広く春秋後期以降の中国語の特徴であると考えられる。結論としては、声調の体系に関しても、戦国楚方言の特徴はすなわち漢代以前『詩経』以後の期間における、一般的な中国語の特徴とおおよそ一致するといえる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　鳥羽加寿也　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　湯浅　邦弘 副 査　大阪大学　教授　浅見　洋二 副 査　大阪大学　講師　鈴木　慎吾

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　楚簡資料による戦国期楚方言音の研究

学位申請者　鳥羽加寿也

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　湯浅邦弘

副査　大阪大学教授　　浅見洋二

副査　大阪大学講師　　鈴木慎吾

【論文内容の要旨】

本論文は、「上古」「中古」「今古」に三分類される古代中国語の内の「上古音」、特に秦帝国成立以前の戦国時代楚地域（おおむね紀元前 5 世紀～3 世紀頃の中国南方地域）の音韻の実態を解明しようとするものである。従来の研究では、上古音解明のための資料が限られていたことから不明な点が多く残されていた。

そこで本論文は、従来の伝世文献資料に加えて、近年中国で次々と発見されている大量の新出土文献を主要な材料とすることにより、戦国期の楚地における言語音の実態を明らかにすることを目的とする。新出土文献とは、具体的には、1990 年代以降に発見・公開された郭店楚墓竹簡、上海博物館蔵戦国竹書（上博楚簡）、清華大学蔵戦国竹簡などであり、これらは、いずれも出土状況または竹簡に対する同位炭素測定によって戦国時代の竹簡であることが明らかになっている資料である。

全体は、序論・凡例に続き、第一章「上古音研究」、第二章「上古音研究の資料」、第三章「韻部」、第四章「声調」、結語、および資料編として「楚簡韻読」「楚簡韻譜」、参考文献目録から成り、分量は 400 字詰原稿用紙に換算して、本論約 280 枚、資料編約 150 枚である。

まず第一章「上古音研究」では、現代の音韻学の基礎となっている顧炎武から江有誥に至るまでの清代音韻学の発展の歴史を概述する。それにより、これまでの音韻学において何が問題とされてきたか、また課題として残されているのはどのような点かを明らかにし、後の第三章や第四章で検討する内容の導入とする。また、清代以降に、西洋の学術手法の応用によってもたらされた音韻学のさらなる発展についても概述し、追究すべき課題を明示する。

第二章「上古音研究の資料」では、従来の上古音研究に用いられてきた各種資料（韻文・通仮字や異文・諧声字・親族言語との比較等）について、それらを活用する上での長所や注意点に触れつつ、本論文で活用する楚簡の韻文や通仮字の、他資料に対する利点を解説する。例えば、古音研究の歴史において、資料への「漢以後音」の混入は、しばしば混乱をもたらしてきたが、科学的測定によりその成立年代の下限が確定されている楚簡は、この点において、伝世資料と比較して資料的価値が高いことを指摘する。また、音韻分野での楚簡を用いた先行研究について、往々にして用例の選択における吟味の不足が見られ、それによって不適切な結論を得ていることを指摘し、本論文においては、疑わしい例は排除し、また例示の際に文字だけを挙げるのではなく、当該文字が

そのように解釈される根拠も示すことにより、用例の量よりも質を重視する方針とすることを述べる。

第三章「韻部」は本論文の主要部分である。ここでは、上古漢語の各韻部について、戦国期の楚地の資料と他資料とを比較することにより、戦国楚音と他地域・時代の音系との異同を論ずる。まず、李方桂『上古音研究』の順序に従い、上古各韻部を配列し、それぞれの韻部の下に、「総論」「個別字」「接触・下位分類」の節を設ける。「総論」の節では、その部の主要な先行研究における音価と、中古音（『廣韻』の韻目）との対応関係、『詩経』における他部との通押例といった、上古音研究における基礎的な情報を確認し、議論の基礎としている。また、楚簡の韻文や通仮字、さらに必要に応じて『楚辞』を利用し、その韻部が戦国楚方言においても、他の韻部から独立しており、なおかつ内部で分化しておらず、単一の韻部としての地位を保っていたことを確認する。「個別字」の節では、上古音の基礎資料から考えられる音韻的地位が、楚簡や『楚辞』といった戦国楚の資料からの再構とは異なる可能性のある字に注目し、その字の帰属を論ずる。「接触・下位分類」の節では、楚簡資料から読み取ることのできる、通押関係や通仮関係等の情報により、韻部間の距離を検討し、その『詩経』音系との差異を考える。また、清代以後の近現代的音韻学の段階で、Yakhontov 氏をはじめとする音韻学者によって主張された、伝統的韻部の元部や歌部等における下位分類が、戦国楚方言においても成立するか否かを検証している。

第四章「声調」では、戦国楚方言における調類体系の特徴を検討する。前提として、まず平声と上声との別が戦国楚方言においても存在することを、楚簡韻文に基づき確認する。続いて去声と入声との関係について、これを甲類韻部（牙音韻尾を持つ韻部およびそれと相配する陰声韻）と乙類韻部（舌音韻尾を持つ韻部およびそれと相配する陰声韻）とに分け、それらの楚簡韻文やその他各種先秦韻文での押韻の状況を確認することで、それらの差異を検証している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の特徴および研究史上の意義は、従来の音韻学研究において中古音や他言語から推定されるにとどまっていた上古音系について、それを具体的に検証しうる新出資料を積極的に活用し、帰納法的な手堅い手法によって戦国楚方言音の様相の一端を明らかにしたことにある。上古音に関しては、清朝以来の重厚な研究の蓄積があり、それを追跡するだけでも相当の学力を要するが、本論文ではそれらの学説と課題を丹念にまとめるところから、着実に研究を始めている。

また、付録として掲載された「楚簡韻読」および「楚簡韻譜」も、楚簡から網羅的に収集した韻文について、特に重要なものには注釈および翻訳を施すことで、本論文の再検証性を担保するとともに、今後の楚簡を利用した音韻研究に資する材料を提示していて資料的価値が高い。

但し、本論文の一つの結論として提示された、戦国楚方言音系と『詩経』及び諧声字を基礎として再構された上古音系との間に、体系的な差異はほとんど見いだされなかったとの点や、そもそも「戦国楚方言音」という概括的な捉え方については、今後さらなる追究を必要とするであろう。郭店楚墓竹簡を初めとする新出土文献は、偶然得られた文字資料の一つに過ぎず、楚方言音の体系を直接代表する資料であるかについてはさらに検討を要し、また、そもそも楚以外の地域からの出土資料が少ない現状においては、これらに見られる特徴をただちに楚地域の方言音と認定してよいか、さらに慎重な考察が必要となるからである。

とは言え、本論文は、なお問題の多く残る上古音研究に対して新たな一歩を記す重要な研究成果である。全体を通じて、資料に即した着実な考察が加えられている点は高く評価できる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。